

「組織拡大・強化と愛知退教連の目的」

1. 組織改編

1984年の発足以来、三十年以上もの間、「愛知県退職教職員協議会（愛知退教協）」として、尾張・三河・名古屋の愛知県下の退職教職員が一致団結して取り組みを進めてきた。そんな中、17年度4月、名古屋市において「県費負担教職員の給与負担等の道府県から指定都市への移譲」が行われたことにより現役組織が組織改編したことにあわせて、愛知退教協も組織改編を行った。

現役の組織構成と同様に、尾張・三河の退職教職員で構成する「愛知県退職教職員協議会（愛退教）」と名古屋の退職教職員で構成する「名古屋市退職教職員協議会（名退教）」がそれぞれ組織され、愛退教、名退教の連合会である「愛知退職教職員連合会（愛知退教連）」を組織した。これは、たとえ、権限移譲が行われても、愛知は一つとなって現退一致で取り組みを進めていくという現役・退職者組織の考えから生まれたものである。現在も愛退教、名退教それぞれが協力し合い、これまでの取り組みを継承しながら愛知退教連での活動を精力的な取り組みを展開することができている。

2. 愛知退教連の課題

組織改編が行われたものの、愛退教からの課題は残されたままとなっている。結成から40年以上を経過した愛知の退職者組織であるが、残念ながら現役教員の中に「愛知退教連」を知らない組合員もいる。本年度も加入期間である3月から4月にかけて、「入るとどんないいことがありますか？」と、退職組合員のいる分会委員長から事務局に電話がかかってくることもあった。そこで、事務局から愛知退教連の目的や意義などについてさまざま話をしても、具体的なメリットのみが追求され、残念ながら組織率も年々減少しているところであり、組織率の減少に伴う財源減少も運営上厳しい状況を生み出している。

3. 課題の解決にむけて

(1)目的・意義の周知

組織率の減少に歯止めをかけるべく、2008年度より各地区の校長会の会合において、入会を呼びかける取り組みを始めた。大きな成果とまでは言えないものの、呼びかけを始める前よりは減少率は下がっている。今後も、組織改編によって生まれた愛退教、名退教がそれぞれの地域にあわせた入会に向けた取り組みを粘り強く行うことにより、取り組みの成果が期待できると考えている。また、現役組合員への勧誘活動にも取り組んでおり、現職の単組学習会などの機会を活用して、退職者組織の目的や意義などについて説明している。校長会への呼びかけと同様に、粘り強く愛知退教連の目的や意義などの周知をはかることで、将来の入会数の増加につなげていきたいと考える。

愛知はこれまで諸先輩の信念と努力により、組合・校長会・教育委員会そしてPTAのそれぞれの団体が手を携えて愛知の教育をよりよいものにしてきている。入会に際し、何らかのメリットを求めたくなるのも理解できるが、現退一致で「愛知の教育をよりよくしていく」という最大の目的をしっかりと理解していただき、伝えることが何よりも大切であると考え。意義が伝わり、愛知退教連の目的を理解していただくことで、組織の拡大・強化に直結すると考える。

(2)メリットを感じられる活動の充実

組織率改善のために、退職者組織の目的を理解いただくことが大切なのは大前提だが、先に述べたように具体的なメリットの追求が多い事実がある以上、入会していることによる実質的なメリットを感じていただく工夫も必要であると考え。

愛知退教連が取り組んでいるものとして、毎年恒例の海外への親睦旅行がある。24年度は台湾へ2泊3日の旅行を行った。親睦旅行には、リピーターの参加者も多く、毎年の旅行を楽しみにしている方もおり、疎遠になりがちな退職者にとって旧交を温める機会となっている。本年度は旅行価格の高騰の影響もあり海外ではなく、国内旅行（大川小と東日本大震災遺構から学ぶ2泊3日）を企画した。しかし、最小催行人数に満たず、残念ながら中止となった。

今後も会員のニーズを把握しながら、会員がメリットを感じることができるような親睦旅行の在り方を考え、活動が前進するように検討を続けていきたい。

4. 現退一致による運動の推進

愛知退教連の目的を考える上で欠かせないことは、現役組織と退職者組織が同じ方向を向いて（現退一致）運動を推進することである。組合活動の延長線にある現退一致の運動の大きな利点として、現役の組合の活動をさらに強固にすることができるということがある。

現退一致による運動の代表的なものとして、選挙への取り組みがある。6月に行った愛知退教連総会で承認された本年度の活動方針の一つに、「組織推せん候補者の必勝を期して取り組むこと」が決定し、今夏に行われた第27回参議院選挙では、現役組織の愛教組連合組織推せん候補者である、田島まいこ氏、みずおか俊一氏の再選を果たすことができた。退職者会員の要求を実現させるとともに、生活と権利を守るためには、各級議会において代弁者が不可欠である。深刻な教育課題を克服し、ゆきとどいた教育を実現できるよう、今後も現役執行部が組織推せんした候補者の必勝にむけ機関紙などで組織推せん候補者の周知をはかるなど全力で取り組んでいきたい。

また、愛知退教連では現退一致による運動推進の一環として、現職である愛教組連合役員も日退教のさまざまな行事や活動などに積極的に参加する工夫をしていることは、特筆すべきことである。今年度も現職役員が事務局として務め、隔年の日退教総会への参加をはじめ、高齢者集会、地公三単産など、ほぼ全ての会に現職役員が参加し退職者組織の活動の理解を深めている。今後も現退一致の運動を推進するために、現職役員の参加を継続したい。

5. おわりに

以上のように、ここまで述べてきた愛知退教連のすべての活動に目的と意義があることは言うまでもない。これらの活動を現在の組織強化、そしてさらなる組織拡大へ向けた足がかりとし、今後も運動を前進させていきたい。

第 31 回 日退教組織活動交流集会 報告 2025.10.10

フードバンク奈良・スクールフードドライブのとりくみについて

奈良県立高等学校退職教職員の会
(なら高退教)

小南 昌紀

もったいないをありがとう！

フードバンクとは

品質には問題がないにもかかわらず廃棄される食品を、必要としている施設や世帯などに無償で配布する団体及びその活動のこと。

フードバンクを活用することで、受益者だけではなく、企業や行政にも利点がある。

フードドライブとは

家庭などで食べきれずに余っている食品を持ち寄り、福祉施設やフードバンクに寄付する活動のこと。

フードパントリーとは

子ども食堂や、さまざまな理由で生活に困っている人々に、食品などを無償で配布する福祉活動で、市役所、公民館、NPO 事務所などを拠点として活用し、支給対象者、支給量、支給日などを決めて提供する。

奈良市による子育て食品支援事業

学校の長期休業に合わせて、年 3 回(春休み・夏休み・冬休み)必要とする世帯に LINE 等で告知し、希望する世帯に 1 世帯あたり 7～8 kg の食品を提供する。

児童扶養手当受給世帯、準要保護世帯(就学援助の受給対象者世帯)

18 歳までの子がいる生活保護受給世帯 約 3500 世帯が対象

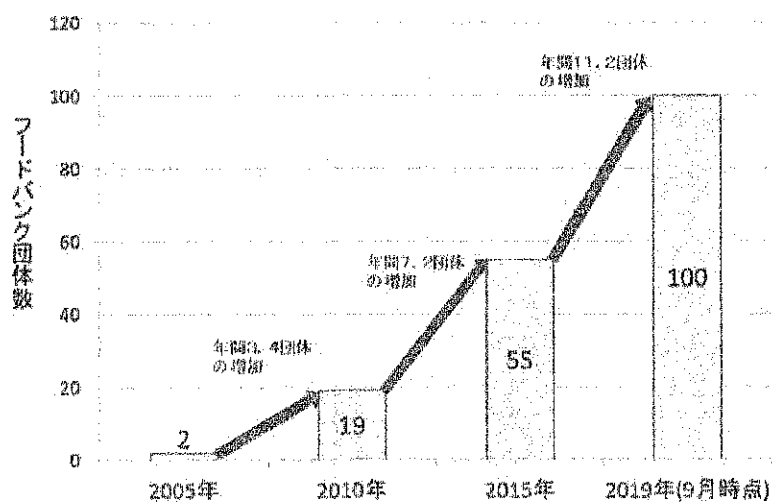
LINE による登録 約 1,100 世帯から申込 (日、場所を選択できる)

参考

2023年度

日本全体年間食品ロス量 464 万トン 事業系 231 万トン 家庭系 233 万トン
奈良県 年間 4.4 万トン 事業系 1.8 万トン 家庭系 2.6 万トン
食品ロス削減推進法（2019 年 10 月） 奈良県食品ロス削減推進計画（2021 年 3 月）
（毎日、一人当たりおにぎり 1 個がすてられている）

国内フードバンク団体数の推移



2020 年 142 団体

2024 年 272 団体

未登録を入れると 300 団体は超える

日本のフードバンクの課題

ほとんどの団体は活動に必要な食品や事業費の確保、マンパワーの不足などが課題となり、十分な活動ができていない現状にあります。

運営上の課題

1. 予算不足
2. 人員不足
3. モノ不足(倉庫や冷蔵庫、運搬車)
4. 食品不足(量・質ともに)
5. 認知度不足
6. ノウハウ不足
7. 連携不足(行政・他団体)

スクールフードドライブについて

今日では、小学校から、授業でSDGsやフードロス削減について学んでいます。また、ボランティア活動についても積極的に取り組みを進めている学校もあります。さらに学校にはベルマーク運動や募金活動などバザー文化の長い歴史もあります。

最近では小・中・高・大と様々な高種から、出前講座をしてほしいという依頼が増えてきました。

先生方や生徒がフードバンクを見学し、フードバンクの仕組みや内容を知ることにより、自分たちの学校で何かできないか、という前向き取り組みを考えてくれるようになりました。

生徒会の行事、総合学習の時間、ボランティア委員会(部)、文化祭、農業クラブなど学校により形式は様々ですが、食品ロス削減と必要な人に提供ということで社会貢献ができるというフードバンク活動を学びの場として考えてもらえるようになりました。

第一学院高等学校奈良キャンパスの場合（通信制・単位制高校）

とりくみの流れ

生徒対象のオリエンテーション→ 第一学院でのフードバンクによる出前講座→ 生徒によるフードバンクセンターの見学→ チラシを作成し、近隣の公民館、オフィス、学校などへ案内状・チラシの郵送→ 取り組みについて模造紙の作成→ POP 看板のデザインや会場レイアウトの作成→ インスタなどの広報→ 近隣地域のポスティング→ 駅前でのチラシの配布→ 現場でのリハーサル→ ならファミリー1F（らくだ広場）でのフードドライブ（役割分担）→ 集めた食品の仕分け作業→ パントリーのための袋詰め作業→ 子育て世帯へのパントリーの手伝い→ 校内での取り組み発表（成長実感発表）

この間の実績

1回目	2023年2月18日	204.8kg	97件
2回目	2023年6月24日	140kg	112件
3回目	2023年11月19日	296.8kg	100件
4回目	2024年2月10日	127.8kg	132件
5回目	2024年6月29日	176.4kg	168件
6回目	2024年11月9日	195.0kg	164件
7回目	2025年2月8日	179.8kg	189件
8回目	2025年10月4日（土）11時～14時	〇〇kg	（〇〇件）

担当のF先生の頑張りで、近隣の商業施設である「ならファミリー」1Fの催事場、会議室を無償でお借りすることができた。専属のイベント会社に関わってくれ、チラシの作成、お店のアプリでの告知、掲示板での告知、500ポイントプレゼントなど高校生の活動を側面的にバックアップしてくれている。

当初関わっていた生徒も卒業し、社会人や大学生になっている。そして、新しい生徒が上級生を見習い踏襲しながらも、毎回改良を加え充実したプロジェクトになっている。また、ただ集めるだけでなく、事前準備から仕分けなどに自ら関わることで、社会性が身につけているとの報告も受けています。

格差社会の進行、円安による物価高もあり、ひとり親世帯の生活が一段と厳しくなっている中で、フードバンク活動が一段と注目され、期待されている。また、貧困対策だけではなく、フードロス削減は地球環境にも優しい取り組みでもある。

これからも、生徒たちの学びとフードバンクの連携を目指したい。